佐呂間町開拓農業協同組合

『戦後開拓』の項目の関連記事

くわしくは、『佐呂間町百年史』に掲載されるので、一般的な内容は簡単に記し、佐呂間町独自のあったことを記して見ます。

設立されたのが昭和二三年　六月二二日

開散機能停止が昭和四七年　三月三一日

設立の目的は、新地の開墾、住宅納屋の建設、生産、生活の向上、以上のことのスムースに行なわれるための協同体。

これからの記事の、呼名を、佐呂間町開拓農業協同組合があったころの呼名を使って書いて行く、その呼名は略して『開協』と呼んでいた。

佐呂間町内の開協は、佐呂間村と言っていた当時、村の中が分村のためと、合併のためと。開拓農協にも大きな影響があった。

分村によって『若佐村』と二つになったのは、昭和二三年で、合併は昭和三一年、

開協の設立が分村後八〇日余りしていたため、開協は、分村若佐側と。母村佐呂間側にと二つ設立された。佐呂間側の方から書いて行こうと思います。

書く筆者は、昭和一三年から始まった戦時中の国策、満蒙開拓青少年義勇軍に参加し、現在の中国の東北地方に、日本が傀儡政府を満洲国と名を付けて打ち立てて、侵略するために、小学校昔の高等科を卒業した満一四歳以上一九歳までの青少年を送り出し始めた年に、私は小学校卒業と同時に、祖国のための忠義のつもりで参加した、その引き揚げ者でもあります。

徴兵適齢になった年が昭和一八年、この年旧満洲国に在って徴兵検査を受けて、甲種合格、昭和一九年二月現在旧満洲国ハルピン部隊に入隊。終戦時は、沖縄県の宮古島、復員したのが、昭和二一年三月二〇日、それで復員軍人でもありました。

（これまでの記事に、エピソードを混えて書けば、読者に、日本の国の戦時中の隠れた話がいっぱいありますが、戦後開拓の記事から外れて行きますので、私が戦後開拓者となる資格者になったことを記すだけにします）

そうして、佐呂間開協の成り立ちと経過に入って行きます。

筆者は、現知来と富武士との中間の、国有林の真中にある、尚和牧場の付近に約三〇年間、戦後開拓の開拓者として生活していたのでした。昭和二一年三月二〇日から、昭和四九年二月一七日までだから足かけ二九年でした。

（注、別記事、「尚和農事組合」が当本の中にあります）

佐呂間町開拓農業協同組の本論に入ります。

尚和農事組合が、昭和二三年一月元旦に設立され、佐呂間町農業協同組合の参加に入って、村内の復員者で、農業の経験者ばかり、うわさによれば、佐呂間村の中のボスの縁故者が多いとまで言われていた。

殆んどが、山稼ぎ、土建人夫等の小学校卒業と同時位いに経験して兵隊になっているため、経済的に苦しくなると出稼ぎとか、近くの造林山で現金収入を計れる者ばかりだったから、

昭和二三年の六月に入って、開協の設立総会を、浪速小学校に於て行うから、戦後の開拓者は全員出席するようの、発起人代表、浪速地区の西原澄雄氏から通知が来た。西原氏は戦前ある団体の有力幹部であったとか、組合設立位い簡単なことらしい。地元浪速地区も全員応じたという。

尚和の方では、既存農家の農協の中に入っているだけで、これから本物の農家らしくなるに、余分な金のかかる別な組合は要らないという考えの者が多い状態で、仕方ないどんなものかまあ出席だけして見ようと、尚和から全員浪速小学校まで出向いて出席した。

開協設立の西原発起人代表は、雄弁に全員参加させるよう説明し、底利の政府からの営農資金借り入れから、各戸にやっている開墾事業に対しての、補助金の申請配分。農機具の一括購入、土地改良事業等は、開協を設立して開協通じてしなければ、政府の方も個々の開拓者をば相手にしないのだと説明された。

一応その西原氏の話で、尚和の者も納得して開協の組合員になることにした。

組合長は西原澄雄氏、事務理事が同じ浪速の平田重臣氏となって平田氏宅を事務所と決定した。

開協設立しての運営資金は、各開拓者が開協通じて借入れする資金の、何％だかをピンハネするのと、開墾補助金、住宅建設補助金のピンハネ、農機具斡旋のマージン。営農が各人軌道に乗ったら、農産物取り扱い手数料を取るそして、肥料石恢取り扱い手数料と土地改良の暗渠排水事業と火薬抜根事業の反別割賦課金、後にレキトーザー抜根事業に変った。加入組合員の出資金は勿論出資した。

この様な中で、尚和地区の人達が懸念しだしたのは、開協設立に一番熱心だった西原氏が半年もせぬうちに離農してしまった。

専務理事の平田氏が組合長に昇格したが、尚和の方にさっぱり良い話が来ない。「組合長の平田さん畑なんかさっぱり拓いてなんかいない」、ここに書けないような話がまだ外に流れ込んだ。

そうこうしているうちに、開拓営農指導員が網走支庁から坂村三郎氏を派遣佐呂間に常駐することになった。自然に開協運営資金が苦しいものだから、営農指員が開協事務を仕方なくしなければならなくなって、坂村氏宅が開協事務所のようなことになった。坂村氏が営農指導員になったのが昭和二四年七月であったから、昭和二五年には殆んど開協事務に携わっていた。

ここに問題が起きた。一般農協に全く関係しない開協のみの組合員の中の、優秀な開拓者が坂村氏宅に集まって、開協本来の目的の事務所を置いて、専門職員も置き、販売購買の事業をしようと意見をまとめて具体化しようと、昭和二五年の春の総会に提出された。尚和地区全員は開協が何やるんだと、皆不満ながらも反対少数者で押し切られてしまって応じなければならなくなった。

尚和地区は、開協の販売購買事業に反対した理由は、細長い五キロの沢道の、尚和道路出た処に、農協の知来支所があって、営農資材や生活物仕の購入に本当にそこが頼りであったから、開協で余計な金のかかることとして慾しくなかったのが本心。

昭和二六年に職員二人、二八年から三二年まで職員三人となった。昭和三一年には、販売購買事業を具体化しようと、機動力の三輪トラックを入れた。

開協独自の事業確大に入ったら、運悪く、戦後はじめての、大凶作群が北海道東北地方を襲った、その凶作年は、昭和二八年、二九年、三一年そして三二年はいよいよひどい年であった。

開協独自の事業確大は、一般農協の理事者が怒り出した。その理由は、開協と農協の二重加入者の分まで開協が、凶作の農産物の少ない開拓農家の作物を集め出したから、二重加入者は、営農資材の肥料や農機具外、生活物仕を農協に依存していて、農産物を開協にとられたと言う結果になってしまった。一番痛手を受けたのは、尚和地区であった。

他の町村の開協のこと聞いて見ると、開協なんか名目だけあって、役場職員が、貸付金や補助金など取り扱っているところもあると言うのに。佐呂間町内の若佐の開協は、町村合併まで、若佐役場職員が事務代行して、町村合併後は、若佐農協職員が必要に応じて事務を行なって、抜根事業も暗渠事業も取り行っていた。

佐呂間開協の事業の行き過ぎが、二重加入者を苦しめただけでなく、昭和三二年には大きな赤字を出してしまった。尚和地区全員の意見を、農協開協一本化してほしいと、昭和三二年の臨時総会にのぞみ、尚事業確大組と対立して、総会は夕刻になっても終らず、各地区から、二名づつの代議員を選んで出し、農協の組合長にも来てもらって、意見交換し、とうとう尚和地区の意見を通してしまって、開協の事務所を農協の中に置いて職員も一人にした。

そのために、それまでの赤字は、開協組合員に平等に振り分け、政府資金を借り入れして直接開拓者に重荷がかからないようにしたが、個々の負債がその分増加したということだった。

そのことがあった後、農協の元専務理事の経験のある片平俊男氏が、知来地区の戦後開拓者になっていたので、尚和地区と知来地区の開拓者が話し合って、開協の理事に出てもらって、陰で作戦を練って、とうとう開協の

組合長になってもらった。
この事が効を奏して、昭和四七年の開協解散まで、スムースに運営され、開拓者の資金ぐりもよくなり、伐根事業、暗渠事業、無電燈地帯の風力発電、各戸に簡易水道も既存農家水道施設が行き渡る前に完成も出来た。
解散時に、各戸に配当金があった程の開協の内容になっていた。
同じ佐呂間町内の、『若佐開拓農業協同組合』のことは、記事の中で少しふれたところがあったが、抜根事業、暗渠事業もスムースに実施されて、佐呂間の開協のようなはじめの一〇年間程のトラブルもなく過ごして来ました。組合長となった方々の名をここに記しておきます。敬称を略して記します。
長縄　秀・橋本一郎・橋本正広・畑尾義治・田中繁雄・和田直太郎。

文責　徳永　良行

名馬　あけぼの

「カーン　カーン　カーン」
立木に斧を打ち込む音で気がついた。
「あんた、大変だったのよ」
覗きこむ妻の千恵子の声がした。
「あけぼのはどうした。」
「あんた、三日間も意識をうしなっていたんだよ。」
妻の声がおっかぶせてきた。
「あけぼのが、一人で帰ってきたので、どうしたのかと、探しにでたら、あんた、落馬して道路にのびていたじゃない、心配したよ、三日間も意識不明なんだもの。」
覚めたばかりの朦朧とした脳裏に、もやがはれるように意識が蘇ってきた。
そうだ、こうしてはおれないのだ。
家畜品評会会場のある佐呂間の市街まで、「あけぼの」を曳いていかなければならないのだ。
三菅逍置が「あけぼの」を買ったのは、欲しくて買った訳でもなかった。むしろ行きがかり上そうなってしまったのだ。
この浪速部落の開拓地に来る前は、大阪の大手の造船会社に努めていたし、戦争が始まる前には、インド方面にサングラスを製造して輸出業をしていた逍置にとって、動物は、犬、猫以外は、動物園で見たぐらいで、馬の様な大動物を、目の前で見たのは、開拓地に来てからで、とても、怖くて触ることも躊躇する代物だったから、離農して行く隣人に話を持ち掛けられたときにも、聞き流していたぐらいで、むしろ、心を動かしたのは、千恵子の方だった。
千恵子も同じ大阪出身で、家庭は、勤め人の一家で習い事も人並み以上にさせてもらえた娘時代をおくり、そんな時期に、親に隠れて乗馬を楽しんでいた事もあり、馬主になれるなんて、この開拓地に来たから出来る様なもの、目の前の三才になる雌馬がすっかり気にいってしまい、渋る夫を説得して手にいれたのが、「あけぼの」であった。
三菅一家が、大阪の戦火を逃れて、食料自給を求めて、佐呂間の地を踏んだのは、昭和二〇年八月一八日であった。
途中、秋田で終戦を知り、混迷のなか、他の四六戸の、一行と共に、未だ入植地が決定していない事から暫く部落会館等に分宿して農家手伝い等をしながら準備の整うのを待つ事になる。
一家は結婚一年少々の逍置と千恵子夫婦と姑の三人家族で、千恵子の親の松本時次一家も一緒に入植していた。
入植地は、富武士、幌岩間の湖岸一五〇町歩の国有林で太い立木は全て処分され、伐根と太い裏木や枝木の散乱する裸地であった。
農業に未経験の入植者は、その日の、生活の収入を得る術さえ無く、厳しい冬の訪れを前に途方に暮れたという。
自分の与えられた未開地に立って、千恵子は健気にも、「何と素晴らしい、ここが私達の新天地だ」と開墾の決意を手帳に記している。「でも、実は殆ど、やけっぱちの気分でしたヨ」と邂逅している。
敗戦の混乱の中、人々は、誰もが明日の糧を求めて、苦渋を舐めていた時代であった。
当時、不足物資の中に、塩があった。

この開拓地の、湖岸は、恰好の塩炊き場となった。何人もの塩炊き達が、やって来て、海岸線には塩を炊く薪の煙が昼夜たちのぼっていた。何が幸いするか、当時の入植者達の唯一と言える現金収入は、開墾地に散乱する邪魔物の伐倒木の裏木等であった。

塩炊きの燃料として、良い値で売れたのである。のこや斧をまともに使える者など殆ど居なかったから、適当に区画を決めて、そのまま売買するのが通常であった。

ある時、逍置は、慣れないのこを引き、おのを振り上げて一式の薪を作った。

薪一式とは、二尺の長さの木を太い物は斧で割って、高さ五尺、幅六尺に積んだ状態で売り買いする単位であるが、逍置は悪戦苦闘して三日かかって積み上げた。

少しでも高く売って金を急いで作る事情が出来たのである。

薪を売って得た三五〇円は浪速国民学校の開校式に出掛ける千恵子の履く雪下駄になった。

姑さんが、逍置の三日掛かり苦労して作った薪が、こんな、ちっぽけな雪下駄ひとつに化けちゃった。と言ってカラカラと笑った。

そうした、現金収入になる木も無くなった頃、開拓からの脱落者が出た。

それは、故郷、大阪が戦後復興してきた事と相まって、昭和二三年秋から翌年の四月にかけて二三戸もの集団離農をみ、残留者はわずか一一戸となってしまった。

「三菅君聞いてくれ」離農する事になった五十嵐が大きな声でこぼしにやってきたのは丁度、そんな時期であった。

「二歳で三八〇〇〇円で買った馬を三歳になって、その値で売ろうというのに、二万だとか何だとかいって誰も買ってくれないんだ。しかも、五年据え置きの一五年償還だと言うのに、俺、なさけなくって」

当時、開墾馬の導入を奨励するため、こうした貸付の制度があった。

とはいっても、当時の家計状態で馬を購入するには、相当の決意がいった。

まして、離農も明日は、我身といった状況であったから尚更、買手は容易には付かなかったのであろう。

逍置夫婦は、そんな、好条件で、もしも払えない事態になるときは、脱落するときだ。俺たちは、絶対に成功してみせると、固く心に誓ったという。

「あけぼの」はそんな成り行きで、三菅一家の仲間入りをしたのである。

「あけぼの」の世話は、もっぱら、馬好きの千恵子の役割だった。

開墾の仕事を終えて暗がりのなかを手探りで餌の草を刈り食べさせた。

毎日、ブラシをかけて、養った。

「あけぼの」はよく肥えて、立派な馬になっていった。

当時の開墾は、先ず、未開地の伐根抜きという大作業から始まった。

鬱蒼とした、森林を伐開した開拓地には、所せましと切り株だらけ、笹をかきわけて、鍬やスコップで根っ子の周囲を掘り起こして、てこやロープで人力で引いて、一日に一、二本処理できれば良いほうだった。

姑と三人で、汗と泥にまみれて伐根抜きをする際で、「あけぼの」がのんびりと草を食んでいる風景が見られた。

部落の人々は、馬に引かせずに、遊ばせて、今日もまた、三人で伐根抜きをしている。三菅は何を考えて居るのやらと、笑った。

実は、逍置たちは、馬の使い方を知らなかったのだから、何と言われても、「あけぼの」のんびりとピカピカにブラシをかけられ、餌を味わって、おれたのである。

「あけぼの」は人目をひく程の名馬に成長していった。

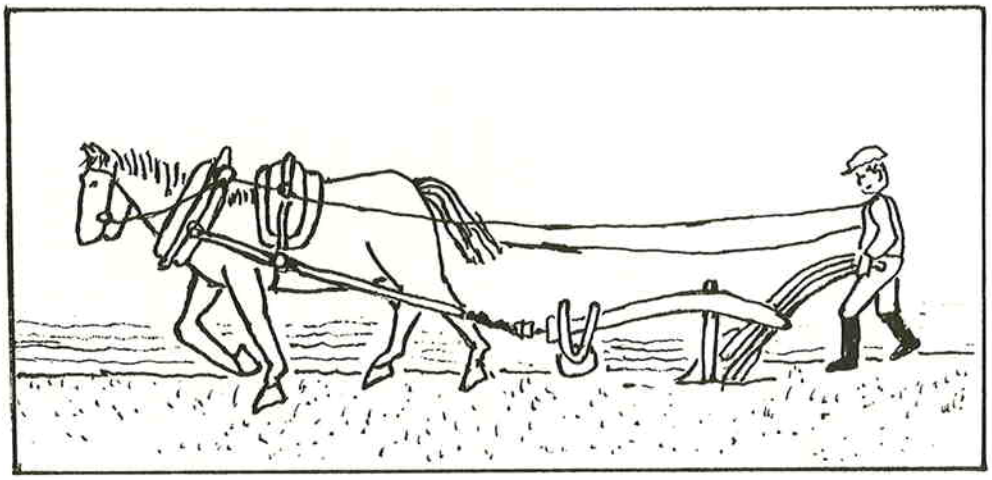
当時、畜産振興を目指して年に一度、祭り等と協賛して全村の家畜品評会が開かれていた。「あけぼの」をこの品評会に出してはどうかと言う勧めがあって、乗り気では無かった逍置もついその気になって、その日、一五キロ先の佐呂間の会場に遠いので仕方なく始めての乗り馬で千恵子達の期待を背に家を出たのである。

結果は見事、途中で落馬して、「あけぼの」だけの御帰還とあいなったのであった。

そんな訳で、名馬「あけぼの」は品評会の晴れ舞台を踏まずに終わってしまった。

のちに、「あけぼの」の子が全村家畜品評

会で見事に第二位の栄冠に輝いたのである。
逍置もやがて馬にも慣れて、「あけぼの」も農機具を引いて開墾の力強い助っ人になっていった。
月日は流れ、湧網線の全線が開通したのが、昭和二八年、この時代が佐呂間町の人口が多かった時で、一六八〇〇人を数えて居る。交通の便も良くなり、木工場が栄えて池内ベニヤ工場が進出してくるなど、市街地は活気を呈していたが、農村は昭和三二年まで大冷害に見舞われていた。
当時は、秋の収穫を当て込み、買物は店借りして年に一度払いと言う状況であったから、皆無に近い収穫期を迎えて、農民は、途方に暮れた。年越しもままならぬ有り様であった。頼りにするのは農協の越冬資金の貸出だけであったから、暮れも押し迫って三月の大晦日にでさえ、農協の貸出口は、借入の思うに任せない農民と、担当職員の押問答が続く情景がみられた。
逍置達、浪速部落は浜佐呂間農協支所が窓口であったが、結局は、埒があかずに、本部まで出向く羽目になった。
農協の幹部職員達の応対は、立場上、理解出来ながらも、蓄えとてない、開拓農民にとっては、こたえた。
いくばしかの借入金を拝み倒して受け取り、逍置は、情け無くて、怒りのやり場がなく、家に帰り千恵子を相手に愚痴った。
「大阪で勤めていれば、俺一人で家族を養



えたのに、開拓では、家族皆で真っ黒になって汗水垂らして働いても、この態だ、、、俺は、今度こそ、大阪に帰る。」と
千恵子はなだめる「大阪に帰っても、又、一から出直し、何とかなるのに十年はかかる。私達には、苦労して耕した土地も、山もあるじゃないの、辛抱しょう」
最初にビートの種を蒔いたとき、ホウレンソウと間違えて、かためて筋蒔きしてしまった。後が大変、間引くにも多すぎて、その年は収穫はサッパリだった。
いろんな笑えない苦労があった。
戦後開拓者の多くは、重い物も持ったことのないずぶの素人にわか農民、途中、脱落せずに来れたのは、家族のいたわりあいで、開墾の気力を持ち続けられたのだと千恵子は思う。
こんな事もあった。
ある年、比較的、作も良く、余裕の出来た秋であった。逍置は、雑穀の一山を指差して千恵子に言った。
これを、あんたに上げるから、好きな様に使いなさい。結婚して僅か一年少々で故郷を後に佐呂間にやって来て、あとは、伐根と笹藪との格闘、農具の使い方も、馬の使い方も判らず、種の蒔き方すらおぼっかなかった、開墾に明け暮れた年月を振り替える暇すらなかった。何一つとして、贅沢は出来なかった。千恵子とて、隣人が脱落して行くのをまのあたりにしながら、帰郷を考えた事も何度もあ

った。夫の心遣いが嬉しくて、辛抱して良かったと涙がでた。

戦争の末期、空襲と食料難のただなかに結婚した。だから、結婚指輪など勿論、夢だった。一度、ダイヤの指輪をはめて見たいと思っていたから、買うことにした。

0・42カラット、し、に、は縁起が良くないからよしな、と言われたが、千恵子は、四、二が八、末広がりで人の八倍は幸せになって見せると誓った。

入植して、50年たった。

私達は、ここで、脱落せずに頑張って本当に良かったと思う。逍置と千恵子は、声をそろえていう。

つい最近の出来事だという。

二人は老人クラブの旅行で温泉に出掛けた。気のあった仲間と、温泉につかりカラオケを歌ったり久し振りに楽しい一夜を過ごす。

翌朝はお決まりのバイキング朝食、ホテルの大広間で食事をとっていると、何か言いたげに男が近づいて来た。

「三菅さん御夫婦じゃご座いませんか。私、覚えておりませんか、、、」と話かけてきた。

当時の獣医のMであった。

思いで話に興じる内に、Mは、実は、と切り出した、僕が往診に行ったときです。

薄暗い、牛舎に朝日が射したんです。

駆け出しの獣医だった僕は、一瞬目を疑ったものです。

搾乳をしている奥さんの指先に朝日があたり、すると、キラリと光りが、目に飛び込んできて、目を凝らすと、指輪じゃないですか。三菅さんの牛舎は掃除も行き届いていて、清潔でしたが、しかし、あの薄暗い朝日のさす牛舎での奥さんの指輪の輝きは、いまだに鮮明に目の奥に残っていますと言うのであった。

「あれは、ダイヤの指輪ではなかったのですか。」

たしかに、場違いの輝きだったのでしょうね。千恵子はカラカラと愉快そうに笑った。

食事の席にもう一人の初老の男が近づいてきて、逍置に低姿勢で挨拶をしていた。

千恵子は男の去ったあと、あの人は誰かと聞くと、逍置は話し出した。

実は、、、

当時、浪速部落にTと言う馬喰うが出入りしていて馬の売買の仲立ちをしていた。

ある日の夕方、暗くなってか一人の若い男が一頭の馬を曳いて訪ねてきた。

馬を交換しないかと持ち掛けてきた。

「あけぼの」は10才を過ぎていたし、暗闇の中でさだかでは無いが、男の連れて来た馬は若く体格もよく、良い交換条件かと思えたのだと言う。

それよりも、名乗った男の名が、逍置が街に出るとき、一服させてもらう家の名と同じだったことから、その身内と勘違いして、すっかり頭から信用してしまったのが、間違いであった。

「あけぼの」その夜のうちに男に曳かれて闇の中に消えていった。

翌朝、あらためて、馬屋を覗いて、びっくり仰天、暗がりでは気が付かなかったが、馬は鼻面の横に孔があいて膿を出していた。

すっかり嵌められたのであった。

部落に出入りしていた馬喰うTは自分の手では騙しかねて、若い馬喰うのKを差し向けてまんまと、「あけぼの」を騙しとったのであった。

さっきの男は、その馬喰うTであったのだ。知っていれば、厭味の一つも言ってやったのにと、千恵子は、また、愉快そうにカラカラと笑いこけた。

何の苦労も無かったかの様に、その笑い声は、屈託無く、底抜けに明るく響いた。

語る人　三菅　逍置
　　三菅千恵子
文責　上伊沢　洋

スパイだった表具師

昭和二六年、敗戦の痛手から立ち直り、日本もようやく復興の胎動が顕著に感じさせる時代であった。

北辺の田舎にすぎないサロマに置いても、昭和二三年若佐村の分村、二五年、下湧別村から床丹部落が本町に編入、二七年には、日米講和条約が発効して、七年間の占領下の重圧感からの解放、翌、二八年には、待望の町制が、施行され、佐呂間町の誕生となった。

ちなみに、この年には、地域住民の永年の夢ですらあった、国鉄湧網線の全線開通が実現して、折しも、大凶作に見舞われた、町民の心を、奮い立たせたと、町史にある。

昭和二六年、こうした大きな、変革のうねりの中で、私達、一家は、住居の新築という父母に取っては一代事業を実行した年であった。

私の家は役場前、小中学校の通学路にあたる、横町にあり、学校からも近く、始業の鐘の音が聞こえてくる位置に在ったから、何か特別なことの無いかぎり、弁当を持って行かずに家にたべに帰るといった具合であった。その頃、二階建ての白壁の家は町内にも、数えるぐらいしかなく、家を新築するにあたり三五歳の父は、白壁の二階建にこだわっていた節がある。

未だ、自動車の充分普及していない時代だったから、農耕も運搬も馬に頼っていた。

家の稼業はその馬の蹄に蹄鉄を装着する、「蹄鉄屋」であったから、秋から、冬に懸けての蹄鉄の履換え時期は、夜も明けやらぬ早朝から、近郊の部落の、農家の人達が、やって来て、作業場近くの学校のグランド周辺の立木とか、役場の門柱がわりのいたやの立木など、馬繋ぎの牧柵がわりになる有り様であった。

父は、二度にわたり、軍隊の招集をうけて中国に兵役にとられて、結核になり傷痍軍人として、帰還して居たから、体力には余り自信なげで、大動物の馬の足を抱え込んでの仕事はかなりきつかったに違いないが、少々の不機嫌さも、鍛冶場のふいごをおして、客を相手に世間ばなしなどで気をそらさなかった母の内助の功あってか、偏屈でとおり、稼業はおかげで繁盛していた。

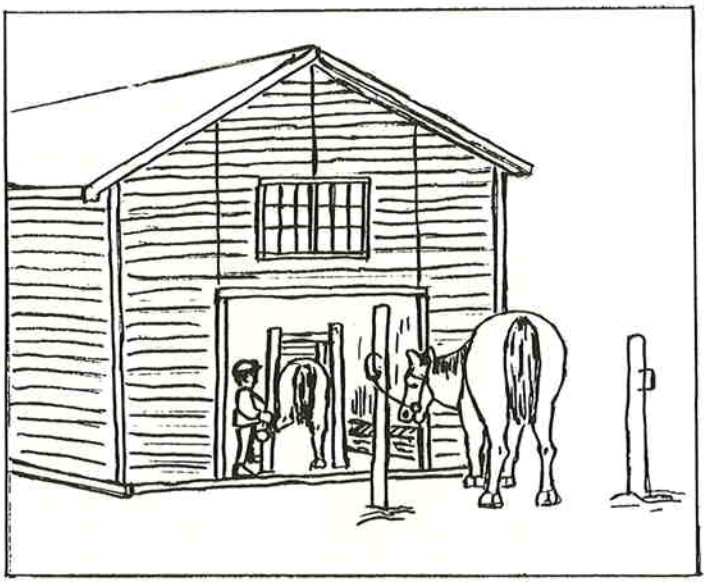
そんな、忙しさも、その後、一〇年余りしか続かなかったのだが、この時代がいわば、油の乗り切った時代で有ったのだろう。

冬には板壁の節穴から小雪の舞い込む小屋からの脱出を企て、憧れの白壁の二階建の建築に取り掛かったのであった。

経済的にも、余裕が出来たのか、当時、知来に山林を求めていた。

まだ元気だった、祖父の新平爺さんが、山一の桂の大木を倒して、客の農家の知人が、馬で、雪の上をバチバチで運搬して来て、太い梁を数本製材して、通し座敷の上材の敷居に使い天井板も厳選して無節材を使うなど、当時としては気の入れた住居作りを目指したのであった。

コンクリート基礎が一般に普及していなかったのか、やはり、馬で、砂利を箱バチに積



んでは運んできて基盤が悪いと言うことを充分考慮して多すぎると思われるぐらい砂利を盛り置き石の基礎に土台は五寸角、柱は四寸角使用と、材料を吟味しての家作りで有ったのだが、一年目の冬に凍上して中央の大黒柱を突き上げて、家に狂いが出てしまった。

今は常識になった、凍上深度一メートルが知識として無かったことの結果であったが、父母にとっては、悔やまれる出来事であったろう。

昭和二五年朝鮮戦争が勃発していた。

南北に分断された同一民族がアメリカ、ソ連の大国の思惑の楯にされての不幸な殺戮が行われ歴史であった。

北海道は、北側の諜報活動の前線の様相があった。夜陰に紛れての

人気の無い海岸からの密入国という、決死的潜入のニュースも、話題になっていた頃である。

共産党の演説を聞いた帰りに警察に尾行されてブラックリストに名前が記される、ということも実際に行われていた頃である。

潜入したスパイ達は、日本語に通じ、様々な職業に身をやつして諜報活動を続けていた。それは、スパイとはいえ、映画の007のような恰好のよい、活動では無かった筈で住民の中に紛れての地味で、余り実りのない行為だったに違いない。

我が家が新築されて間もなくのことであった。まだ木の香のかおる、居間に、一人の男が、上がり込んできた。

痩せ身の小柄などこかなよっとした、青白い顔の男で、髪は刈り上げて灰色の乗馬ズボンを履き、夏で有ったのか、白い開襟シャツ姿であった様に記憶している。

古びた、大きめのリュックを背負い、脇に丸めた筒を二三本抱え込んで、撫ぜ肩の背を前屈みにして、入り込んできたのである。

彼は、力の無い女性的な声で表具屋だと名乗り、筒から、掛軸を取り出して見せた。

新築の家にそうした物を売り歩いているとのことであった。

そんな事から、何度か、家を訪れて来るようになっていた。

昼頃にやって来て、夕方まで粘り、三〇センチ四方位の木枠の中に白抜きで「飛竜」と書かれた書を売りつけて行ったこともある。

結構売り込みも上手だったのであろうか、良い値で買わされていた。

世間話しには話題も途切れずに饒舌だったがこと、自分の身の上話になると、話をそらし名前を表具屋、で通していた様な気がする。

そんな風だったから、食事の一度や二度は振る舞っていた筈である。

或る夜のことである、九時か一〇時にはなっていたかも知れない。

玄関戸を叩く音で、開けると、表具屋が酒に酩酊して転がり込んできた。

母が対応に出て、遅いから帰ってくれと言うと、呂律の回らない状態で、悪口雑言を吐き、様子も殺気じみてくる。

不気味になって、父が外に引きずり出した。完全に腰が抜けたのか、リュックサックを抱え込んで、歩道の上にへたばってしまった。翌朝、姿はなく、垂れ流したのか、小便の跡か丸く黒々と影の様に残っているだけであった。それっきり表具屋は姿を見せなかった。

それから、二年も経ったろうか。

北海道新聞に紋別だったか、遠軽だったか、定かでないが、腹痛を訴えた、男が、病院で虫垂炎と診断され、緊急に手術が必要となり下着を取るように言ってもどうしても脱ごうとしない、命に関わるので、無理やり、脱がしたところ、女だったと言うのである。

しかもその後の調べで、北鮮の諜報活動をしていたことが、判明したという記事が載っていた。

実は、あの表具師は、男装した、北側の女のスパイだったのである。

どの様な過去が有ったのか、経緯があったのか知る術もないが、過酷な運命に翻弄された、彼女もまた、歴史の犠牲者の一人であったことは間違いない。

上伊沢　洋